

暮らしの中の死 : Dorothy Wordsworthの死生観

著者	吉川 朗子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	54
号	4
ページ	69-88
発行年	2003-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001053/



「暮らしの中の死

—Dorothy Wordsworth の死生観¹—

吉 川 朗 子

William Wordsworth の作品には『墓碑銘論』(*Essays upon Epitaphs*, 1810), 『逍遙』(*The Excursion*, 1814), 「マイケル」("Michael," 1800), 「兄弟」("The Brothers" 1800) など, 墓碑銘への関心, 死への関心が見られる作品が多々あるが, 妹 Dorothy もまた, そうした関心を兄と共有していた。たとえば1803年のスコットランド旅行の思い出を記した回想記(*Recollections of a Tour made in Scotland, 1803*)には, 埋葬場所についての記述や墓地に佇む場面が十ヶ所以上ある。1822年のスコットランド再訪記(*Journal of my Second Tour in Scotland, 1822*)では, 墓地を訪れる場面のほか, 墓碑銘を書き写してくる場面, 死者のいる家へ立ち寄る場面なども記されている。1820年のヨーロッパ旅行を扱った旅行記(*A Tour on the Continent, 1820*)でも, 自然災害に巻き込まれて命を落した人の話や子供の死亡率の高い村への言及など, やはり死への関心というものが色濃く見られる。概して後の作品になるほど死の影は濃くなるが, 1800年から1803年にかけて書かれた『グラスミア日記』(*The Grasmere Journals*)にも, 葬式に参列する場面や教区民の死にまつわるエピソードなどが, パイを焼いたり洗濯をしたり郵便局へ行ったりといった生活臭のする記述に混じって散見される。興味深いのは, 北ヨークシャーの教会で兄ウィリアムと幼馴染

1 本稿は第112回関西コールリッジ研究会例会(2002年11月)での口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。

染の Mary が結婚式を挙げた後、三人でグラスミアへ向かう途中立ち寄った村で、時間つぶしのために教会墓地を散策する場面であろうか。

As soon as we had breakfasted we departed. It rained when we set off [....] We were obliged to stay two hours at K [irby] while the horses were feeding. We wrote a few lines to Sara & then walked out, the sun shone & we went to the Church-yard, after we had put a Letter into the Post office for the York Herald. We sauntered about & read the Grave-stones. There was one to the memory of 5 Children, who had all died within 5 years, & the longest lived had only lived 4 years. There was another Stone erected to the memory of an unfortunate woman (as we supposed, by a stranger). The verses engraved upon it expressed that she had been neglected by her Relations & counselled the Readers of those words to look within & recollect their own frailties.

(Oct. 4, 1802)²

結婚式の場面のすぐ後にこのような場면을記すというのがドロシーらしい。彼女は兄の結婚式のすぐ後で、幼くして亡くなった5人の子供の墓と、親戚に見捨てられた哀れな女性の墓碑銘を読んで、何を考えていたのか。ドロシーはこの場面を始めとし、見たり聞いたり行ったりした事実を坦々と書き記すばかりで、自分の感想、考えを述べることが少ないので、彼女の日記や旅行記に散見される死にまつわる記述から、彼女の死生観を探るというのはなかなか困難なことである。しかし死にまつわる彼女の記述が、どういう場面と並べて置かれているのか、どのようなコンテキストに置かれているのかを検討しながら推測することは可能だろう。この場合、結婚式の場面と墓地散策の場면을並置するということは何を意味するのか。ドロシーは、兄の結婚は

2 ドロシーの日記からの引用には Dorothy Wordsworth, *The Grasmere Journals*, ed. Pamela Woof (Oxford: Oxford UP, 1991) を用いる。

幸福な日々の終わり、自分にとっては死に等しいと思っていたのだろうか³。しかしさらにこの日記の続きを読んでいくと、ドロシーは陰鬱な気分を出すために墓地散策の場面を記しているのではないことが分かる。陽光の降り注ぐ中、墓地はむしろドロシーに穏やかな気分をもたらしている。墓地の静けさ、穏やかさは、彼女の乱れた心を鎮める働きをしているようである。兄の結婚について記された10月4日の項目は、はじめの方こそ乱れた様子が見られるが、この墓地の場面以降はまたいつもの落ち着いた文体を取り戻すのである。

ウィリアムにも共通することであるが、ドロシーの死に対する感じ方というのは、不安、恐怖、暗さなどと結びつくのではなく、休息、穏やかさ、緑の大地などと結びつく傾向がある。またウィリアムの死生観と比較するならば、ドロシーの場合、死は日常生活の延長にあるものとして、より強く認識されているということが特徴として挙げられるように思う。本稿では、そうした観点からドロシー・ワーズワスの死生観について考えてみたい。

1. 安らぎ、慰めの場としての墓地

さて、ウィリアムとメアリーの結婚したのは1802年10月4日のことであり、周知のとおり、この結婚は、アミアンの和約⁴でイギリスとフランスの間の郵便や人の行き来が可能になった結果、実現したのだった。1801年の暮れより、フランスに残してきた Annette Vallon⁵とグラスミアのウィリアムの間では、手紙が頻繁に取り交わされるようになり、1802年7月には、いよいよウィリ

3 たとえば Susan M. Levin は、兄の結婚によって自分は見捨てられるのではないかと恐れるドロシーは、親戚に見捨てられたこの女にわが身の不幸を重ねていたのではないかと推測している。(Dorothy Wordsworth and Romanticism. (New Brunswick: Rutgers, The State University, 1987), p.27)

4 1802年3月27日。これに先駆け前年10月より、英仏両国間の通行が可能になる。

5 ウィリアムは1792年にフランス滞在の際にアネットと恋仲になり娘までもうけていたが、経済的事情から一時帰英した後、英仏間が戦争状態に突入、フランスに戻ることはできなくなり、結果的に彼は二人を捨てることになった。

アムはドロシーとともにフランスへ渡ってアネットとの再会を果たす。そして過去の情事を清算して晴れて自由の身となったウィリアムは、帰国したその足で（ロンドンに三週間滞在した後）北ヨークシャーはギャロウ・ヒルへ赴き、ブロムプトン教会で幼馴染のメアリーと結婚式を挙げる。ウィリアムの心は晴れ晴れとしていたかもしれないが、兄に恋心に近い感情を抱いていたドロシーとしては、その兄の昔の情事の清算、そして結婚という旅に付き合わされて、心中どれほどかき乱されていたか察するに余りある。1802年の彼女の日記には、「気分がすぐれない」「半日床についていた」「ため息をついた」「涙が溢れた」というような記述がいくつも出てくる。そうした中、この辛い旅に出かけるひと月ほど前の日記に、近所の人のお話として次のような挿話が記録されている。

[Aggy Fisher] was going to attend upon Goan's dying Infant. She said 'There are many heavier Crosses than the death of an Infant', & went on 'There was a woman in this vale who buried 4 grown-up Children in one year, & I have heard her say when many years were gone by that she had more pleasure in thinking of these 4 than of her living Children, for as Children get up & have families of their own their duty to their parents 'wears out & weakens'. She could trip lightly by the graves of those who died when they were young—with a light step, as she went to church on a Sunday.'

(June 3, 1802) (アンダーラインは筆者)

また、3週間後の6月22日の項にもアギーとの会話が記されており、そこでは夫が病気のため負債を抱えて苦しんでいる一家のお話が記され、いっそ神様が彼の命を突然お召しになっていたらこんな苦悩は味あわずにすんだであろう、我々はみな辛いことを抱えているのだ、というアギーの意見が書き留められている。

ここには、「人生は辛く」「死は安らぎである」という考え、そしてまた

「墓地は慰めの場所である」という考えが現れている。ドロシーがこの話を聞いてどう思ったのか、どうしてこの話を日記に記したのか、例によって彼女は何もコメントしていないので推測するしかないのだが、彼女は、「幼子の死よりも重いくびきというのは沢山ある」だとか「我々はみな辛いことを抱えている」というアギー・フィッシャーの言葉を、確かにそうだとあきらまきながら聞いていたのではないだろうか。その一方で、墓地に眠る子供たちのもとを訪れるのに、まるで日曜日に教会へ行くような軽やかな足取りで向かう女性についても、彼女は共感を覚えていたように思われる。上述のように、兄の結婚式の際も、たまたま立ち寄った教会墓地での散策が、彼女の乱れた心を穏やかに鎮めてくれた。墓地は、死者にとっては休息の場、生者にとっては慰め、心の平安を与えてくれる場なのである。

2. 日常生活と隣り合う死

ドロシーの描く墓地は、櫟の木立に囲まれた薄暗く淋しい場所ではなく、太陽がさんさんと降り注ぎ、輝く緑に覆われた明るい場所、「軽やかな足取りで」行きたくなるような場所である。そのあたりのことは次の引用にも見られる。これは『グラスミア日記』の1800年9月3日の項からのものであり、ここには教区の女性の葬式に出席したときの様子が記されている。ドロシーの死生観がよく表されている箇所である。⁶

A fine coolish morning. I ironed till 1/2 past three—now very hot. I then went to a funeral at John Dawsons. About 10 men & 4 women. Bread cheese & ale—they talked sensibly & chearfully about common

6 Elizabeth A. Bohls は *Women Travel Writing and the Language of Aesthetics 1716-1818* (Cambridge UP, 1995), p.181においてこの箇所を引用し、ドロシーにとって地域共同体というものがいかに重要かということ、そして彼女の眺める風景は常にこうした地域共同体の人々の暮らしに彩られており、その辺りがピクチャレスク理論家が風景を眺める態度と異なることを指摘している。

things. The dead person 56 years of age buried by the parish—the coffin was neatly lettered & painted black & covered with a decent cloth. [...] I was affected to tears while we stood in the house, the coffin lying before me. There were no near kindred, no children. When we got out of the dark house the sun was shining & the prospect looked so divinely beautiful as I never saw it. It seemed more sacred than I had ever seen it, & yet more allied to human life. The green fields, neighbours of the churchyard, were green as possible & with the brightness of the sunshine looked quite Gay. I thought she was going to a quiet spot. [...] I had not finished ironing till 7 o'clock. The wind was now high & I did not walk—writing my journal now at 8 o'clock.

(Sep. 3, 1800) (アンダーライン筆者)

まず注目されるのは、アイロンがけという極めて所帯じみた日常的な行為が、葬式という厳かな出来事を挟む形で記されているということである。私的な日記とはいえ、こういう話題の並べ方をするのはなんとなく不謹慎というか、死者に対して失礼であるような感じがしなくもない。しかし見方を変えれば、ドロシーの場合、死というのはこのくらい日常生活と隣り合ったものとして捉えられていると言えるのではないだろうか。1803年のスコットランド旅行のことを記した旅行記でも、墓地に佇みながら、そのすぐそばで洗濯物を取りこむ女性、子供たちの姿を描いており、ここでも死者たちの休らう場所と生きている人々の生活の場所が隣接していることに関心を向けていることが窺われる。また、1822年の『スコットランド再訪記』では、子供の死の床に付き添う母親が、一時その場を離れてケーキの焼き具合を確かめ、また戻ってくるという場面が記されている。

Joanna said to me "There is a corpse within" and the mistress desired me to enter. [...] A chearful fire was in the centre of the small black apartment, and at one end lay the body of a child

covered with a clean linen cloth. The mother of the child (the mistress's Sister) seated at the head of the Bier. [...] Cakes were baking on a Girdle—a little bare-footed Girl came & cowered over the smoke and flame; and the sorrowing Mother, seeing no one else at liberty, suspends her last duties to the dead to turn the cakes, and goes back again to her place. While I was seated by this humble fire-side, musing on poverty, & peace, on death & the grave, the mistress of the house repaired to an inner room, and brought out the basin of milk, which she courteously offered me. I begged some of her warm bread, and would fain have kept my seat.

(Sept. 21, 1822)⁷ (アンダーライン筆者)

最愛の我が子を亡くした悲しみがいかに大きくとも、母親は他の生きている者たちの食事その他の世話をしなければならない。旅人をもてなさなければならないのである。ドロシーの態度を見ると、雨に降られたとは言え、子供が死んだばかりの家へ入って行って、暖炉と食べ物を求めるというのは、少々無神経に見える。しかし、我が子が死んでも日常の仕事を淡々とこなす女主人の姿に、ドロシーは打たれるものがあつたのではないだろうか。人が生まれ、死ぬということが、人が目覚め、食事をし、仕事をし、汚れたものを洗濯し、眠りにつくという日々繰り返される生活のリズムの中にさりげなく組みこまれていることに、彼女は感動したのではないだろうか。

話を『グラスミア日記』に戻すと、葬儀についての記述とアイロンがけについての記述とが並置されることも、死を日常生活の延長上に捉える彼女の死生観の表れであると思われる。

もちろんだからといって、ドロシーが人の死というものを軽視しているわけではなく、彼女は厳かな思いと悲しみを以って葬儀に参列しているのであ

7 引用は *Journal of My second Tour in Scotland, 1822*, ed. Jiro Nagasawa (Tokyo: Kenkyusha, 1989) より。

るが、暗い死者の家から出て教会墓地へ向かうときの、太陽が朗らかに輝く情景描写にもまた、ドロシーらしい死生観が表れている。家の戸口から見た眺めには“divinely beautiful”（神々しいまでに美しい），“sacred”（神聖なる）などの形容詞がつけられ、その描写には葬儀の厳かな気分が投影されていることが分かるが、その一方で“allied to human life”（人間の生と関わる），“gay”（楽しげな）という形容語句が加えられ、風景が人間の生命、暮らしによって活気付けられているという認識が示されている。“Human life”というのは人生、つまり死をも含めた人間の運命のようなものを指しているとも考えられ、“sad music of humanity”（“Tintern Abbey”）という言葉に近いものが感じられるが、後に続く生き生きと輝く緑の畑の描写を読むと、彼女の思いは死より生の方に傾いているとも見える。いずれにしても、彼女の眼には、死者たちの休む教会墓地と生きている人々が暮らす緑の野が地続きのものとして同時に捉えられる。そしてドロシーは、息を引き取ったばかりのこの女性が静かな場所へ行くのだと考えるが、それはまるで緑の木陰か何かについて語っているような口ぶりである。彼女にとって墓地というのは、暗くて怖くて人のよりつかない寂しい場所なのでなく、またこの世と隔絶された聖なる場所でもなく、生活の場と隣り合った“a quiet spot”，静かな安らぎの場なのである。

死者の休む場所と生者の暮らす場所とを隣り合っているとみなす彼女の考え方は、ウィリアムの死生観にも共通することで、たとえば『墓碑銘論』では彼は、死者は遺族の暮らす場所のそばに埋められるべきだ、教会墓地と生活の場は隣り合っていなければいけないというようなことを言っている。また「兄弟」という作品では「死者の家は／牧草地のすぐお隣である」（169-170）と言い、『逍遙』でも、教会墓地の緩やかに起伏する緑の地面と、その周りのなだらかな緑の丘とが美しくオーバーラップされている。「緑の野」と「教会墓地」とを、「隣り合うもの」として明るい陽光のもとに描くドロシーの美学は、明らかに兄のそれと共通している。さらに言えば、死を日常

生活の延長上に捉える点においては、ドロシーの方がよりラディカルかもしれない。生と死の近接性は、ウィリアムの場合は意識的に概念として言明されたり、あるいは美学的に示されたりするが、ドロシーは、はっきり意識せずにそれを感じているのである。アイロンがけの場面と葬儀の場面を並列したり、子供の遺体と食事の場面を並列したりするというのは、ウィリアムには出来ない芸当であろう。

3. 緑の大地——生と死を繋ぐもの

死者と生者をつなぐものとして、ドロシーもウィリアムも「緑の大地」というものをキーイメージとして用いているわけだが、今度はドロシーの死生観において「緑の大地」が果たす役割を見ておきたいと思う。

1820年7月、ドロシーはウィリアムやメアリーなどとともにヨーロッパ旅行へ出かけるが、⁸旅を始めて一週間目、彼らはベルギー中部の村ワートルローへやってくる。ここは1815年ナポレオンがウェリントン率いるイギリス・プロシア連合軍に大敗を喫した場所である。そのときからわずか5年しか経っていない戦場跡へやってきたわけである。ナポレオンの捕虜であったというベルギー人が当時の様子を話してくれるが、フランス語で話されたため、話がよくわからなかったとドロシーは告白している。しかし戦場跡に立った時、彼女は不意に理解する。

The wide fields were covered with luxuriant crops, —just as they had been before the battles, except that now the corn was nearly ripe, and then it was green. We stood upon grass, and corn fields where *heaps* of our countrymen lay buried beneath our feet. There was little to be seen; but much to be felt;—sorrow and sadness,

8 William, Mary, Dorothy, Mr. and Mrs. Monkhouse, Miss Horrocks というメンバーで行われる。

and even something like horror breathed out of the ground as we stood upon it! [...] The ruins of the severely contested chateau of Hougamont had been ridded away since the battle, and the injuries done to the farm-house repaired. [...] "Nature's universal robe of green, humanity's appointed shroud"⁹ enwrap them.

(July 17, 1820) (イタリックスは原文。アンダーラインは筆者)

大殺戮が行われたはずの場所なのに、ここにはそうした殺戮の跡は少しも見当たらず、一面の穀物畑が、戦いの前と変わらず風に揺れている——戦いの前は青々としていたが、今は黄金色に稔っているという違いはあるものの、風景は変わらない——というのだが、ドロシーは戦いの前にこの場所にいたはずはないから、ここは、ガイド役のベルギー人の話したことを自分の言葉であるかのように記しているということになる。土地に暮らしてきた人の視線に自分の視線を重ね合わせて、眼前の風景ばかりでなくその背後にある過去の風景をも眺めようとする、ドロシーの想像力豊かな目を感じさせられる記述だ。

あるいは、彼女は5年前にここで戦った英国兵士たちの視点に自分の視点を重ねているとも言える。自分の足元には同国人の遺体が眠っていると感じたとき、大地が死者と自分とを結びつけ、兵士たちが見た戦い前の青々とした麦畑を、自分にも一瞬垣間見せてくれるように感じたのかもしれない。そして大地は、その上に立つ者に、その下に眠る者たちの悲しみと嘆き、慄きを伝えてくる。しかし目の前に広がる情景は、悲壮な様子、戦いの傷跡はほとんど何も見られぬ穏やかで静かな田園風景である。

「見るべきものは少なかったが、感じるものは多くあった」という一文は、言葉で説明されても理解できなかったことが、実際に戦闘の行われた場所に立った時に、一瞬にして理解できたということをも示唆している。何を理解

9 『大陸旅行記』からの引用には *Journals of Dorothy Wordsworth*, ed. Earnest de Selincourt (Hamden, Connecticut: Archon, 1970). 所収の *Journal of a Tour on the Continent, 1820* を用いる。

したのかといえ、ば、「自然の大きな営みの中では、人間界のどんな大事件もごく些細なこととして飲みこまれ消えていってしまう。けれどもその一方で、人間は目の前にないものをも感じ取ることが出来る——自分の足元には死者たちが眠っていると感 じる ことが出来るのだ」ということではないだろうか。最後に引用されているのは、兄ウィリアムの『逍遙』(Bk. VII:996-7)からの一節である。三人の旅人たちが牧師から教会墓地に眠る人々の生前の物語を聞き、改めて自分が立つ緑の大地には、死者たちが眠っていることを感 じる場面だ。これを思い起こしながら、ドロシーは、人間の運命というのはいずれ緑の大地という経帷子をまとうものなのだと理解しているようだ。彼女にとって、死ぬということは大地に横たわることなのだろうか。

そこで次に引用したいのは、やはり『大陸旅行記』からであるが、モンブラン、アルヴ河、シャモニの谷を臨むコル・ドゥ・バウムの高台で、ウィリアムとドロシーが陽の当る大地に横たわる場面である。

W. [illiam] and I lay down upon a sunny bank beside a rivulet, not delightful to the eye, for it was grey and muddy, but travelling with a voice as chearful as the brightest. We shut our eyes to listen, and to feel the pleasure of the sunshine in perfect rest.

(Sep. 14, 1820) (アンダーラインは筆者)

この一節の前後には、ほんの3週間前に目の前のモンブランの峰で2人の旅行者と3人のガイドが雪崩に巻き込まれて死んだという話や、1年前に英国人の少女が馬に乗っていて崖から滑り落ちたという話、スイス人ガイドの子供がアルプ川で溺れて死んだという話、また自分たちも切り立つ崖に立ち、ここで崖が崩れたらどうしようという死の恐怖を感じる場面など、死の予感があちらこちらに影を落としており、そうした文脈で読むと——これはLevinも指摘していることであるが¹⁰——「完全なる休息」という言葉は、単

10 "the phrase 'in perfect rest' refers not only to the peaceful, tranquil moment but also to the perfect rest of death". (Levin, p.99)

に穏やかな休息ということだけでなく、永遠の休息、すなわち死をも暗示しているように思われる。大地に横たわり、日の光、川の音を楽しみながら、ドロシーは、大地の下に横たわる者の静けさ、安らかさというものをも感じているのではないだろうか。

こうした推測を支持してくれそうな一節が、『グラスミア日記』にある。1815年に「場所に名前をつける詩」(“Poems on Naming of Places”)のひとつに加えられることになった「世の楽しみを離れて」(“When, to the attraction of the world”)で歌われている「ジョンの森」へ、ドロシーとウィリアムが散歩に出かけてきたときのことが記された箇所だ。

We then went to Johns Grove, sate a while at first. Afterwards William lay, & I lay in the trench under the fence—he with his eyes shut & listening to the waterfalls & the Birds. There was no one waterfall above another—it was a sound of waters in the air—the voice of the air. William heard me breathing & rustling now & then but we both lay still, & unseen by one another—he thought that it would be as sweet thus to lie so in the grave, to hear the peaceful sounds of the earth & just to know that ones dear friends were near.

(April 29, 1802) (アンダーラインは筆者)

ここでも二人は目を閉じて大地に横たわり、鳥の声、水の音に耳を澄ますが、ドロシーはこのときに感じた安らかな静けさを、ここでははっきりと「墓」に横たわるときの心地よさと比べている。墓に横たわることを大地の穏やかな音を聞くこと捉え、それを「心地よい」とする感覚、これがウィリアムとドロシー2人に共通する「死の感覚」なのである。ドロシーの日記、旅行記には、他にも「大地に横たわる」場面がしばしば出てくる。そしておそらく大地に寝そべることがもたらす休息感、墓地散策がもたらすそれと同性質のものであることが、上記の例から推測できるであろう。

4. 死者・遺された者・共同体

以上見てきたようなドロシーの死生観は、どれも観念的で、彼女が実際に体験した肉親の死については何も語っていないようにも見える。そこで最後に、ドロシーが自分の愛する家族を失った際にはどのような反応をしているか、主に彼女の手紙から¹¹確認しておきたい。

彼女が生涯で始めて経験した肉親の死というのは、6歳の時の母親の死、そして12歳の時の父親の死である。これらについては、その当時の彼女自身の言葉が残っていないのだが、主に15歳から17歳のときに親友にあてた手紙の中で言及されている。これらを読むと、ドロシーは父母を亡くした悲しみというものを当時はあまり強くは感じていなかったように見える。おそらくそれは、母親を亡くしたときには彼女が幼すぎたこと、母の死後預けられていたハリファックスの叔母 Elizabeth Threkeld の家が本物の家庭のようであり、寂しさを感じずにすんだこと、そして父親が亡くなったときには、すでに父親と離れて6年も経っていたこと、などによると思われる。ドロシーは、母の従妹であった叔母エリザベスのことを本物の母のようだったと言い、ハリファックスの家を「家庭」と呼んでいる。両親の死は幼心にも深い悲しみを残したには違いないが、それはこの第二の家庭のおかげで忘れられていたのである。¹²心の底に封印されていたこの悲しみ、痛みがよみがえるのは、15歳になってペンリスにいる祖父母の元に預けられることとなり、ここで辛い仕打ちを受けたときのことである。

Never, till I came to Penrith, did I feel the loss I sustained when I was deprived of a Father. One would imagine that a Grandmr would

11 ドロシーの手紙からの引用には、*The Letters of William and Dorothy Wordsworth, Second Edition* (ed. Earnest de Selincourt, revised by Chester L. Shaver, Mary Moorman, Alan G. Hill, Oxford: Clarendon Press, 1967-1982) を用いる。

12 “My Aunt, you know, has been my Mother.” (to Catherine Clarkson, July 19, 1807); “The loss of a mother can only be made up by such a friend as my dear Aunt” (to Jane Pollard, January, 1788) などの記述を参考。

feel for her grandchild all the tenderness of mother particularly when that Grandchild had no other parent, but there is so little of tenderness in her manner or of anything affectionate, that while I am in her house I cannot at all consider myself as at home, I feel like a stranger.

(To Jane Pollard, November, 1787) (アンダーライン筆者)

この手紙には、母のような愛情を注いでくれた叔母、「家庭」であったハリファックスの家と対比される形で、祖母とペンリスの家が描かれている。ハリファックスからペンリスへの移動は、彼女にとってはいわば第二の母喪失、家庭喪失であったのである。

ここで注意したいのは、ドロシーが言及しているのは「父親」を亡くすことの痛手であるということだ。ドロシーが父親と母親どちらにより愛情を感じていたかといえ、手紙等から推測する限り、De Selincourt も指摘しているように¹³、母親に軍配が上がる。しかし孤児としての嘆きを伝える際は、父親喪失をもって代表させることが多い。なぜかといえ、父親を失うことは家を、財産を失うことに結びついているからだ¹⁴。母を失ってもドロシーには代理の母と第二の家庭が与えられたが、父親を失うことで彼女はその両方を奪われた。肉親を失う悲しみよりも、彼女にとっては自分を守ってくれる家庭を失った悲しみ、不安の方が強かったように見える¹⁵。

見方を変えれば、両親の死そのものは、ドロシーにとって強く「喪失感」を意識させるものにはならなかったと言えるのではないだろうか。少なくとも

13 Earnest de Selincourt, *Dorothy Wordsworth: A Biography*, (Oxford: Clarendon Press, 1933), pp.3-4.

14 "We in the same moment lost a father, a mother, a home, we have been equally deprived of our patrimony by the cruel Hand of lordly Tyranny" (to Jane Pollard, Feb. 16, 1793) とあるように、父親が亡くなったとき、子供たちに与えられるべきその遺産は、彼が仕えていた James Lowther に横取りされてしまい、それらが正当に支払われるまでには長い年月の裁判を要したのである。ドロシーは「父親がいれば家庭を失わずにすんだのに」といったことを何度か嘆いている。

15 ドロシーが生涯を通じて、家庭 (Home) というものに対する執着心を抱き続けたこと、家族あるいは心を通い合わせるもの同士がひとつ屋根の下に一緒に暮らすことに対する強い憧れを持ち続けたことは、こうした伝記的事実と関わっていると思われる。

もその空隙は、代理の母、代理の家庭¹⁶によって補うことができたのである。他方彼女は同じくジェーンにあてた手紙の中で、幼くして両親をなくした経験は自分たち兄弟の絆をいっそう強固なものとしたと語っている¹⁷。両親の死は必ずしもマイナスの働きをするにとどまらず、遺された者たちの絆を強めるというプラスの働きもするのだ。

こうした考えは、彼女が後に書いた“George and Sarah Green” (1808)¹⁸という実話に基づく物語（あるいは回想録というべきかもしれない）に発展している。ここでは、両親と家を失った8人の子供たちが、いかにしてグラスミアの複数の人々に引き取られ、そこに第二の家庭を見出していったかということに力点が置かれている。孤児たちが、親はなくても養父母によって十分幸せになれることが主張されている¹⁹。死者たちをないがしろにするわけではないが、彼女の視線は死者たちよりも遺された子供たちの方へ向けられている。両親と家をなくした子供たちは、地域共同体の中に第二の親と家庭を見出して生きていき、他方死者たちの思い出は、遺された共同体の人々の間で、炉辺物語となって生き続ける。死んでいった者にとっても遺された者にとっても、死は単なる喪失ではないのだ。共同体の存在のおかげで、どちらにも新しい生が与えられる。しかも共同体は、死者の思い出を共有し語り継いでいくことによって、その絆をより強固なものにすることができる²⁰。

16 “The Mother’s Return”, “An Address to a child in a high wind” など、ドロシーは「代理母」「代理の家庭」を主題とした詩をいくつか書いている。

17 “We have been endeared to each other by early misfortune. We in the same moment lost a father, a mother, a home, [...] These afflictions have all contributed to unite us closer by the Bonds of affection notwithstanding we have been compelled to spend our youth far asunder.” (to Jane Pollard, Feb 16, 1793)

18 1808年3月グラスミアの住人であったGreen夫妻が雪の中遭難死してしまう。遺された8人の幼い子供を教区の人々が手分けして引き取ることになる。Dorothyは孤児たちを助けるための基金を募るために、兄Williamから薦められてこの物語を書く(同年5月)が、これを出版することについては、あまりに最近の出来事を題材にしており関係者に迷惑がかかるからという理由で頑なに拒否する(to Catherine Clarkson, Dec. 9, 1810)。初めて出版されるのは、1936年のことである。George and Sarah Green: A Narrative, ed. Earnest de Selincourt (Oxford: Clarendon, 1936) 参照のこと。

19 Levinはこれを例に挙げて、ドロシーにとっていかに共同体が重要であるか、彼女にとって「地縁」——共同体の絆——は「血縁」——家族の絆——に匹敵するのだと指摘している。(Levin, pp.41-52)

20 遺された者たちが死者の思い出を共有することで自分たちの間の絆を深めるという考え方

こうした死生観、共同体観は、ウィリアムの「兄弟」、『逍遙』に描かれたそれに通じると言えるだろう。

両親の死、それによる空隙は、ドロシーにとっては別のもので埋めることができた。しかし兄弟の死、姪、甥の死については受け入れがたかったようである。ドロシーが大人になってから、日記や手紙に随時自分の気持ちを書き記すようになってから経験した肉親の死というのは、1805年2月の弟 John の死、そして1812年6月の姪の Catharine、ついで同年12月の甥の Thomas の死、この三つが挙げられる。これら三つの悲しい出来事に対するドロシーの反応は、少しずつ違いはあるものの、どれも悲痛な思いに満ちている。無論敬虔なクリスチャンらしく、「死を嘆いてはいけない。彼らはこの世に留まり続けるよりも、神の御許に召された方がはるかに幸せなのだから」というようなことを何度も自分自身に言い聞かせ、愛する人の死を穏やかに受け入れようという努力はしている。しかしとても、「日常生活の延長上として死を静かに受け入れる」というわけにはいかない。ジョンが船の事故で亡くなったという知らせを聞いたときには、どこを歩いても何を見てもジョンのことが思い出されて涙が溢れる、ということを繰り返し述べている。²¹ また幼い姪と甥を半年のうちに続けて亡くした際には、彼らが眠る教会墓地の隣に暮らし続けることは耐え難いということで、早くライダルマウン
トへ引っ越したいということを手紙の中で何度ももらしている。そのうちの二つだけ例を挙げておきたい。

The very air of the place—the stillness—the occasional sounds and above all the view of that school, our darling's daily pride and joy—that churchyard his playground—all oppressed us and do

は、たとえば『スコットランド旅行記』にも、墓地に佇みながら墓地というのは家族をひとつところに集める力を持つものだという思いに耽る場面などに窺える。

21 To Christopher Wordsworth, Feb. 27, 1805; to Richard Wordsworth, Mar. 4, 1805; to Lady Beaumont, Mar. 18th, 1805など。

continue to oppress us with unutterable sadness. [...] yet on the other hand we should wish to be within a walk of Grasmere— and should wish to keep up that bond betwixt the living and the dead by going weekly to the parish Church beside which they are laid;

(To Catherine Clarkson, Jan. 5, 1813) (アンダーライン筆者)

It is having those objects continually present in which the children used to delight—above all the school and the Church-yard which is the greatest evil. At Rydal we shall be removed from these, [...] It is true that when she [Mary] comes to Church, on a Sunday, it will be like coming to the home of the dead Children; but on the other hand to be entirely removed from them would be a source of lingering regret, and we all wish that our Bodies may lie beside theirs.

(To Mary Hutchinson née Monkhouse, Feb. 1, 1813)

(アンダーライン筆者)

これらの手紙を見ると、「生と死とが隣り合う共同体」などというのは所詮観念的なものであり、実際の死はもっと生々しくて、痛々しくて、隣り合って暮らすには耐え難いものだということを示しているように思われる。けれども注意したいのは、ドロシーが教会墓地から離れたいと思うのは、それが子供たちの墓のある場所だからではなく（死者のそばにいたくないということではなく）、それが子供たちの遊び場だったからということだ。そして引越すといっても、グラスミアの丘を臨むことの出来る場所、ライダルマウントに移るに過ぎない。彼女は、グラスミアから離れたいといっても歩いていける距離には留まりたいのだと言う。何故なら、「あの子達が傍らで眠る教会へ毎週出かけることで死者と生者の間の絆を維持したい」からだ。そして彼女は、「日曜に教会へ来るたびに死んだ子供たちの家を訪ねるような感じがするでしょう」とも述べている。死者と生者の間に「絆」というものを認

め、墓地を死者の住む「家」と捉えること、そして教会を死者と生者とが集う場所として捉えること、これらはまさにドロシーやウィリアムがその作品の中で展開する死生観である。つまり彼らの日記や旅行記や手紙や作品の中に描かれる「死者と生者の共同体」、「その要としての教会と教会墓地」といった考え方は、単なる観念的なものではなく、実感に支えられたものということが分かる。

そしてまた、死者の横たわる大地の上を生者が歩くという考え方もまた、次のような手紙の文面から見て取れる。

On the Sunday afternoon and the Monday I had been for several hours with Willy and her [Catharine] in the Churchyard and they had run races and played on the very ground where now she lies.

(To Catherine Clarkson, June 23, 1812)

Blessings to be on his [Thomas's] grave—that turf on which his pure feet so often have trod—

(To Catherine Clarkson, April 6, 1813)

ドロシーは、亡くなった子供たちの生前最後の姿を思い出すと、それがまさに今彼らが横たわる大地の上を遊びまわる姿であったことに気づき、言い知れぬ感慨を覚えるのである。何故子供たちが教会墓地で遊んでいたかと言えば、ワーズワス一家が当時牧師館に住んでいた²²からであり、墓地が手近な遊び場であったからだが、墓地が彼らの日常生活のリズムの中に組み込まれていたということ、そして彼らの二人の子供たちが、生前走り回ったその同じ大地の下に眠ることになったというこの個人的な経験が、ウィリアムとドロ

22 家族が増え Dove Cottage が手狭になったため、1808年5月、彼らはグラスミア対岸の Allan Bank へ移るが、寒さと湿気、通気の悪さのため住むに耐えず、1811年5月より牧師館へ移る。しかしこの家も、寒さ、煙突の具合の悪さ、水はけの悪さなどの欠点を抱えており、さらに子供たちが2人立て続けに死ぬという不幸も重なったため、1813年5月彼らは Rydal Mount へ引っ越し、余生をここで過ごす。

シーの作品（とくにウィリアムの『逍遙』，そしてドロシーの『大陸旅行記』）に出てくる生と死の隣り合う感覚，死者の眠る大地の上を旅人が歩くというイメージへの愛着を生み出したのではと思われる。²³

結 語

以上，ドロシーの日記，旅行記，手紙，物語作品から例を拾い上げながらドロシーの死生観について考えてきたが，これらにおいては，「死」は厳粛なテーマとして特別扱いされることはなく，パンを焼いたり，アイロンがけをしたり，庭仕事をしたり，散歩したり，手紙を書いたりといった日常生活で繰り返される瑣末な出来事，あるいは旅行先で見聞きしたものの印象を記すことに紛れる形で現れる。彼女にとって死・葬式・教会墓地といったものはすべて日々生きていく暮らしのリズムの中に組み込まれたものであるのだ。ドロシーは，自分の死生観をきちんと整理して理論化することはなかったが，だからこそウィリアムの唱えた「生者と死者の作る共同体」という理想は，単なる理想でなく，確かに彼らの生活の中に実在していたのだということの証になると言えるだろう。

Selected Bibliography

- Dorothy Wordsworth. *Journals of Dorothy Wordsworth*. Ed. Earnest de Selincourt. (London: Macmillan, 1952)
- . *The Grasmere Journals*. Ed. Pamela Woof. (Oxford: Oxford UP, 1991)
- . *Journal of My second Tour in Scotland, 1822*. Ed. Jiro Nagasawa. (Tokyo: Kenkyusha, 1989)
- . *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, Second Edition*. Ed. Earnest de Selincourt, revised by Chester L. Shaver, Mary Moorman, Alan G. Hill. (Oxford: Clarendon Press, 1967-1982)

23 “George and Sarah Green” でも，母親の安らう墓のそばで遊ぶ子供に暖かいまなざしを向けるドロシーの姿が見られる。

- . *George and Sarah Green: A Narrative*. Ed. Earnest de Selincourt. (Oxford: Clarendon, 1936)
- Earnest de Selincourt. *Dorothy Wordsworth: A Biography*. (Oxford: Clarendon Press, 1933)
- Elizabeth A. Bohls. *Women Travel Writing and the Language of Aesthetics 1716-1818*. (Cambridge UP, 1995)
- Susan M. Levin. *Dorothy Wordsworth and Romanticism*. (New Brunswick: Rutgers, The State University, 1987)